Japanese Association for Religious Studies

して、次第に遺影写真や写真のように似せて描いたモノクロの写真画の遺影を奉納するように変化していったのである。

それに対し、岩手県沿岸部などでは多少例外はあるが、こうした絵額のようなものはほとんどみられず、写真のように描いた写真画や遺影写真が奉納されるようになっている。今回はその事例として、宮古市鍬ヶ崎の常安寺別院に奉納された遺影を取り上げる。常安寺は宮古市内で最も檀家を抱える曹洞宗の大寺院である。鍬ヶ崎は港町として、流通や漁業の拠点として商家や歓楽街もありかつて繁栄した地であり、その地域の寺院として別院があり、人々の葬儀や供養の場となっている。

現在、明治以降の死者の遺影二八一枚があり、最も古い没年は明治三九年の死者の写真画の額である。写真画や写真、油絵などもあるが、圧倒的に写真が多い。奉納の目的は「為菩提」「為霊」と死者の供養を目的としており、また第二次大戦前までは、夭折、海難、軍人などの遺影が多い。また絵額同様、一枚の額に複数の死者を合わせたものがあり、それは親子や兄弟と思われる者が多い。

さらに興味深いのが、遺影を奉納する人を「納人」といっているが、納人が複数となり、遺影の下などに記されているものが比較的多いことである。こうした複数の納人の遺影は、昭和一七年の死者のものまでが見られ、この年まで四五人の死者の遺影があり、内二五枚が複数の納人によるものである。納人は死者の遺族、親族だけでなく、同級生や軍の同期、学生などであり、追慕だけでなく、仲間の死を恐れ、慰撫する目的もあったとも思われる。さらに故人が軍人や先生の場合、顕彰的側面もあった。一方、遺影だけでなく葬儀写真の額が二枚あり、死者を追悼するためにつくらえた葬列絵巻やその後の葬儀写真集との関係をうかがえるものでもある。

以上のように、県中央部や遠野盆地などの絵額、遺影奉納の影響を受けながら、死者の慰撫と顕彰を行うために、遺影を製作し奉納するという慣習がこの地域にも成立し、第二次大戦後にはさらに展開していったことがわかる。その頃になると、葬儀における遺影の浸透とともに、その対象は特別な死者だけでなく、一般的な供養の一貫としても行われていったのである。

奄美・南薩地域と戦争死者慰霊
――戦局環境複合の慰霊論に向けて――

西村　明

本発表では奄美群島の徳之島における太平洋戦争の戦争死者慰霊を対象として、当の戦争死者が置かれた戦局のあり方や環境を視野に入れることで見えてくる新たな慰霊像に迫ることを試みる。

明治大正期までは、軍事的に重視されていなかった南西諸島は、日本の統治下・占領下に入った太平洋諸島や東南アジア島嶼部とともに、一九四〇年からの武力南進の方針のなかでその重要性が高まり、奄美大島要塞は海軍の前進基地としての役割と、陸軍の南方の進出の中継基地という二つの役割が付与される。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

こうした太平洋戦争後半の戦局の展開を念頭に置き、徳之島の戦争死者の慰霊施設を訪れると、特攻基地の慰霊碑や沈没輸送船・疎開船・戦艦の慰霊碑など太平洋や東南アジアの島嶼域が巻き込まれてきた戦局の相似形をそこに見出せると同時に、慰霊施設や慰霊祭が島の文化や自然のあり方に規定される性格をもつことも確認することができる。

徳之島亀津港の北側の高台に「なごみの岬公園」がある。ここは、一九四四年六月二九日朝に亀徳沖で撃沈された輸送船富山丸の犠牲者のための慰霊塔が立つ場所である。輸送船富山丸は、独立混成第四四・四五旅団を中心に四千人以上の兵員を乗せ、一九四四年六月二七日正午鹿児島港から沖縄に向けて出航し、二九日午前七時二五分徳之島亀徳沖二カイリを航行中に米潜水艦スタージョンの魚雷攻撃により亀徳沖に沈み、三千八百名以上の死者を出した。

こうした富山丸の犠牲者と関わる場所は、地元では一方でコーティナイ（背筋が寒くなる）と表されるような所であったが、現在ではその痕跡は見られず、慰霊塔の周辺はきれいに整備されている。毎年春に富山丸遺族会全国連合会のメンバーがここで慰霊祭を行う。徳之島の植生とは一見異質なオリーブの木が目に留まるが、これは、同遺族会が一九九九年から二年がかりで約四千万円をかけて名碑の建立や一帯の整備を行い「なごみの岬公園」と命名した際に、平和祈念の象徴として犠牲者にゆかりのある小豆島より植栽されたものである。そしてオリーブフェスタを行い、徳之島出身のギタリストの演奏によるフラメンコの披露など、オリーブと徳之島の闘牛からスペインが連想されるイメージ作りなどがなされた。

島外から来る遺族たちにとって、物理的距離の制約から慰霊塔の管理を島の人々にお願いせねばならないという問題が一方にあり、他方で慰霊祭の継続がもう一つの懸案事項として存在している。したがって、こうしたイメージ転換は、島民や外部の人間を巻き込む形で慰霊祭を継続させたいという遺族たちの趣旨に沿ったものであるということが理解できる。死者にまつわる歴史的事実の記録を保持しようとする理性的な努力の一方で、そうした祭りの祝祭的側面が慰霊を継続し、他者を巻き込む力を持つと意識されている。

さらには、自然のもつ超然としたリズムが、慰霊にかかわる人々の感性的・情緒的部分に訴えて死者の弔いを促しているということも確認することができる。近年、アジア太平洋戦争の旧戦地での慰霊や遺骨収集について調査・研究が進みつつあるが、戦争死者の死のあり方を問うと同時に、環境が及ぼす戦局そのもののあり方や慰霊の展開にあたえる影響をも視野に入れることで、慰霊に向かう人々の努力の方向性と、それに対して自然がもたらすものが見えてくるはずである。

死者の棲むランドスケープ
――公園緑地協会の墓苑構想について――

土居　浩

日本における墓制の近代性を考察するにあたり、いわゆる「霊園」として人口に膾炙した公園墓地は、物理的側面はもち

NII-Electronic Library Service